

路上の人々 — 新宿 1995～96年

岩田正美

〔要約〕

ここ数年、目に見える形でのホームレス＝路上生活者の存在が目につくようになってきている。しかしこれを積極的に社会問題化していく方向性が今日のわが国には希薄である。路上生活者の存在を社会問題化させる媒介項として社会調査の意味を検討した上で、新宿の路上生活者を一斉調査によって概観し、あわせてインタビュー調査から路上生活者の多様な姿を路上生活と一般社会との〈距離〉という視点からスケッチする。

〔キーワード〕

ホームレス、路上生活者、社会調査、距離、大都市、新宿

1. ホームレス問題と社会調査

(1) ホームレスは社会問題なのか？

東京をはじめとするわが国の大都市部で、いわゆる路上生活者とか野宿者とよばれる人々の存在がはっきりと目に付くようになってきたのは1992年の暮れから93年にかけての冬であった。そしてその後1996年の現在まで、これらの路上の人々の存在は視覚的にはますます明確になって、あたかも都市の景観の一部を構成するようになってきている。たとえば、東京では、新宿駅を中心に、池袋、渋谷、東京など大きな駅とその周辺の公園や路上、後樂園など大きな公園の周辺、あるいは伝統的に日雇労働者の街として知られた山谷・浅草・上野から隅田川沿いの一帯、また京浜工業地帯の一角であった大田区と多摩川沿いなどに広範に広がっている。大田区と多摩川を挟んだ川崎市、寿町を抱えた横浜市、笹島と繋がった名古屋駅周辺、西成区を中心とする大阪市など、東京以外の大都市

でもやはり顕在化してきているという報告¹⁾がある。

実際その集中地域の一つである新宿を管轄する新宿区福祉事務所のいわゆる「住所不定者」の来所相談件数は1989年度(平成元年)には1289件でしかなかったものが、92年度には2,199件、93年度には3,708件、94年度13,201件、95年10月現在で55,908件と、飛躍的に増大している。また山谷の城北福祉センターの生活相談件数も、89年度27,794件から93年度には76,618件と第一次オイルショック後で最も多かった1975年度の58,993件を超え、さらに95年度には86,347件を記録している。大田区の4つの福祉事務所の「住所不定者」相談件数も92年度2,108件から、93年度4,920件、94年度12,931件、96年9月時点で12,980件と、これまた急速な拡大である。もちろんこれらは路上の人々の数を表しているのではなく、延べ相談件数であるから、たとえば食料などの「法外援護事業」を積極的に行えば行うほど、「相談者」は増えるという傾向がある。しかし、この急速な増大は、路上にいる人々の存在やその生活困窮がますます明確になってきていることを示すものであることは疑いもない。

しかし、こうした路上の人々の存在の視覚的明確化が、これらの人々の存在を「社会問題」として扱う傾向を促進させているかといえ、必ずしもそうとはいえない。当初ジャーナリストによって盛んに報道されたことはあるが、さてこれを今日の社会問題として積極的に取り扱う姿勢がわが国の社会にあるかということ、首をひねらざるをえない状況がある。ホームレス問題そのものは、いわゆる開発途上国における都市の爆発の一側面としてばかりでなく、先進国でも80年代ごろから現代の深刻な社会問題として、研究者や行政、ジャーナリストの多くを巻き込んできた経過がある。そこでは、ホームレスは長期化する構造的失業、貧困、社会的排除や差別、都市再開発とそのジェントリフィケーションによる住宅問題、家族の崩壊、麻薬の蔓延などの複合的な要因が絡み合った問題として議論されてきた²⁾。わが国でもこうした外国の事情は紹介されているが、当の日本で繰り返されている路上生活をこうした社会問題の系列に、しかも現代のいくつかの社会問題の一つの集約点として位置づけている人々はほんの一握りでしかないように思える。もちろん、たとえば東京都では1994年に東京都と特別区、特別区人事厚生事務組合の三者によって「路上生活者問題に

関する都区検討会」が発足し、行政的対応の対象とする認識は見られるが、基本的にどのような問題としてこれを取り上げるかの視点すら定まらないままに、オイルショック時の山谷における臨時対策をなぞっているように見える（この行政の「路上生活者対策」についてはいずれ稿をあらためて検討したい）。

現在の路上生活者への一般的な視線はおそらく二つであろう。一つは「変わった人たち」という見方であり、もう一つは建設作業員の「落ちぶれた」姿という解釈である。前者は、いわゆる「価値の多様化」という便利な用語で括られるような、「多様な生き方」の一つの選択肢であり、したがって、個人の人生哲学の範疇にこの現象を押し込めてしまう見方である。この見方では、路上生活のさまざまな剥奪状態は貧困ではなく、多様な人生選択の結果である。たとえば、1996年暮れの朝日新聞の特集連載記事では、豊島区の母子餓死事件、江東区の車中生活者の衰弱死、路上生活者の死、を96年の東京の「風景の向こう側」として取り上げながら、これらの「孤独な餓死」の増加を「生き方の多様化に、福祉制度がついていけない」という言葉で総括しようとしている³⁾。もう一つは、路上生活者を単身中年男性の「建設作業員」と総称される単純日雇労働に従事する人々のバブル崩壊期の一時的失業問題に収斂させて捉える見方で、これには従来からの「寄せ場問題」の路上への拡張として見る見方と、彼らを人生の敗残者として蔑視したり「怠惰、アルコール依存、浮浪癖」という病理的状态として見る見方とがある。「寄せ場」問題の延長線上に捉える見方は、これを社会問題として積極的にとらえる視点はもつが、あくまで労働者とその失業という断面にこだわる傾向が強い。後者の見方は、たとえば新宿の路上で繰り広げられる振舞酒での「宴会」や喧嘩を目撃した人々や、それらの人々の「嘘言」に振り回されていると感じている救急隊、警察、福祉行政などで働く人々の中に根強い。なお、人生の敗残者、怠け者という蔑視を、「人権」を考慮して表現したのが「多様な生き方」という洗練された表現だ、ということもできよう。

ともあれ、わが国におけるホームレス問題は、社会問題なのか、そうでないのか曖昧で、特に貧困問題としてその剥奪状態を問題視する視線が極めて脆弱であるという際だった特徴を持っている。なぜ日本ではこのような展開をとるのかは興味深いテーマであるが、ここではその要因として次の点だけ指摘し

ておきたい。それは高度経済成長期を通じて形成された「働く気になれば、職なんてどこにでもある」「選り好みしなければ食えないことはない」という楽観的生活態度の根強さと、「働こうとしても誰でも雇ってくれるわけではない」「働けないで排除された人々は、さらに排斥差別される悪循環が待ち受けている」という社会に大きく変貌しつつある現代という転換期への認識の希薄さである。確かに、高度経済成長期の日本には、「人手不足」感が恒常化し、選ばなければ稼げる状況があるていど創り出されたのは事実であろう。人生の敗残者にも「土方仕事」のような最後の手段が残されており、したがって働ける人が最低食うに困ることはあり得ない「豊かな社会」になったという認識が根強く形成された。バブルの崩壊はこうした価値観自体に変換を迫るはずのものであったが、この不況を一時的現象としてずるずる引っ張ってきた今日の日本社会にあって、楽観的生活態度は容易になくなりそうもない。後にも指摘するように、こうした価値観は当の路上生活者自身も強く持っており、したがって彼ら自身の剥奪状態を無権利状態として社会に告発する姿勢は弱い。個人でも「homeless」と書いた段ボールを胸に掲げ、コーラの紙コップを突き出して自分自身の窮状をアピールするアメリカのホームレスと、ひっそりと段ボール箱に横たわり、支援団体と一緒にだけときどき声を挙げる日本の路上生活者とは、極めて対照的であり、それが社会問題としてのこの問題の扱いの差異を象徴的に示しているともいえよう。

(2) ホームレス問題の〈発見〉と社会調査

周知のように、社会問題は「社会問題になる」過程をもっている⁴⁾。ある状態が社会にある、というだけでは社会問題にはならない。その状態を、社会構造と結びつけて「解釈」し、「告発」する過程が媒介しなければならない。時には「ある状態」がないにもかかわらず、この媒介だけがあって問題をでっち上げることすらあるとさえいわれている。それはともあれ、「解釈」「告発」はマスコミ、研究者、行政、政治家、運動体、などさまざまな主体によって行われる。今日では特にマスコミの役割の大きさが指摘されるところであるが、いずれの主体の告発にとっても「ある状態」を描き出し、それを社会構造と結びつけて解釈

する素材を提供する社会調査が重要な意味を持つことはいうまでもない。とりわけ社会問題の積極的な解決策や予防の模索にとって社会調査の果たす役割の大きさは、たとえばイギリスの福祉国家の前提になったC. ブースやB. S. ラウントリーの貧困調査の実施と、そこから解釈された社会的貧困の〈発見〉をみれば容易に納得できよう。

この場合、社会問題の〈発見〉にとっては、「ある状態」の量的動向の把握がさしあたり重要な意味を持つ。つまり、問題だとするためには「ある状態」の大きさ、あるいはそれが増加していることを傾向的に示す必要がある。貧困にせよ、ホームレスにせよ、非行問題にせよ、それらの数量をめぐって論争が行われ、そこに社会調査の「証拠」が必要となる。特に問題の解決を望む勢力は過大な数字を、これを回避したい勢力は過小な数字を、しばしば適切な証拠資料もなしに持ち出す傾向があるため、社会調査がこれを批判していくという経路をたどることが少なくない⁵⁾。アメリカの80年代のホームレスの問題化の過程でも「政治家やジャーナリストは正確なホームレス人口を要求しはじめた」（ジェンクス、1995 P14）結果、多くの社会調査が出現し、その数の正確さを競った経緯がある。問題解決を望む勢力が数の捏造をしがちなのは、マスコミなどの目を引くためのいわば「正義のための偽り」の側面をもち、したがって数自体に意味があるというより「問題である」ことを示すためのものでしかないという真実がある。その意味ではこうした「政治的数字」が間違っているとはいえないが、それでも「誰が何を算出したのか特定できる」証拠資料のついた「科学的数字」が存在しない限り、問題化は困難になることをジェンクスは示唆している（同上、PP16-17）。

以上の量的把握は、「ある状態」の定義や意味についての検討を前提とする。何を貧困とするのか、何をホームレスとするのかという基準の問題である。ラウントリーの貧困基準の「科学化」以来、客観的基準における定義だけが意味をもつように見なされてきたが、その客観的基準も社会の変貌の中で変化しうる相対的な側面を持ち、また主観的基準の重要性も指摘されている。ホームレス、あるいは路上生活者の場合も、広義、狭義を含んだ幾通りかの定義がなされているが、いずれにせよ、どの定義を採用した計測、調査なのかが明確にさ

れる必要がある。なお、この定義ともかかわって、具体的な調査手法としてホームレスのような流動形態をとる人口の把握の困難性がある。英米などでは、大きく分けてシェルターのような収容施設にいる人々（シェルター・ホームレス）と駅、公園、バス停、放棄建築物などの路上レベルにいる人々（ストリート・ホームレス）の調査の両方から接近することが多い。前者が比較的正確に把握されるのに対して後者は困難なので、ある地点での両者の割合を算定して、それを使った推計を行うという方法が用いられている。

さらに、社会調査は「ある状態」にあるのはどのような人々か、なぜそのような状態になったのかという内容の検討、さらにはどうすればその状態を社会は解決しうるか、についての政策提言への見通しをたてる証拠を提示することが期待される。アメリカのホームレス調査が挑戦した一つの課題は、従来のホームレスないしは「浮浪者」像と、80年代に爆発的に増えていったホームレスの相違を明確にすることであった。アルコール依存の白人単純労働者という典型像を覆して、「新しいホームレス」あるいは家族のホームレス、女性のホームレスなどの諸側面が調査によって浮かび上がり、80年代以降のホームレスが複合的な社会要因のなかに出現していることが明らかにされていった。なお、このような質的側面の調査は、量的計測よりもさらに「その状態にある人々」の主観的要素を重視せざるをえない。こうした質的内容に関する調査は、参与観察、インタビューのような手法をとることが多いが、特にインタビューはその人の言葉を通して解釈されたホームレス生活やそれへ至る原因が語られていく。インタビュアーがこうした主観をできるだけ排除しようとするか、逆にむしろ積極的に「どう語るか」に依拠していこうとするかで、そこで明らかにされる内容は異なっていこう⁶⁾。

わが国の路上生活者の問題が社会問題になりそうでならないのは、先に述べたようなステレオタイプな見方やその背後にある従来の生活価値を覆すような社会調査による事実の〈発見〉と解釈がまだ十分ではないからだともいえる。第一われわれは、路上生活者の正確な数を知らない。視覚的な確認がとれても、それをジェンクスのいう「科学的数字」で表すことができない。また、いったい誰が路上にいるのか、なぜ路上にいるのか、これからどうしたいと思っている

のか、などについても年齢や路上生活の期間などの他はほとんど明らかにされていないといってもよい⁷⁾。特に最も基礎的な量的把握についての調査が欠落しており、この点では戦前の国勢調査に付帯して行われた「浮浪者調査」の歴史からはるかに後退した状況がある。路上生活者の推計で東京で唯一なされたものは、1995年と96年に行われた「特別区内の路上生活者概数調査」である。これは、東京都、23区、電鉄関係者が特定の駅、公園、道路、河川などの地点でそれぞれ行ったとされており、電鉄関係は、営団地下鉄28駅、JR東日本5駅、都営地下鉄20駅、その他民間鉄道1駅であり、悉皆調査ではない。また調査期間も一斉調査ではなく1ヶ月ほどの期間内でのものであるため、重複は裂けられない。一般に概数調査は、外から数を数えるいわゆるフロントガラス法か、キーパーソンによる報告が用いられることが多いが、この概数調査の具体的手法そのものは報告されていない。また95年と96年の比較が、全く同じ地点調査なのかどうかははっきりしない。しかし、それにもかかわらず、約3300名という数字、しかも95年と96年が同数という実態が報告され、一応の行政基礎資料となっている。

2 新宿における「路上生活者」の概観

(1) 調査とその概要

以上のような「社会問題になりそうでならない」路上生活者の状態を、「問題化」していく過程で不可欠のものとして、われわれは、二つの社会調査を計画した。一つは、新宿駅周辺の路上生活者の数、属性などについてのできるだけ正確な一斉調査を行うこと、もう一つは、路上生活者のインタビュー調査によって、近年増加した「路上生活者問題」とは何かを、彼らとの対話を通して考察することである。前者はまともな概数調査すら存在しない現状、後者は先述したステレオタイプな見方にたいして風穴をあけたいという思いが込められている。なお、ここでの路上生活者の定義は、目に見えるホームレスの典型として、文字どおり、路上にいる人々である。地下街や地上のビルの片隅に、調査時間帯である7時から9時頃までに段ボールを広げて寝る準備をしていることが一つの目安となるが、新来者はただ通路にしゃがんでいることもある。ただの

通行人との区別は、この調査がボランティア活動を基盤としており、定例訪問活動時に配布する飲み物とセットで行われたため、ただの通行人は排除できたと考えている。ただし、路上生活者はもっと広い範囲で捉えることもできる。今回は視覚的に明確な路上生活者に限定されている。

この二つの調査の基盤となったのは、新宿における路上生活者へのささやかなボランティア活動である⁸⁾。1993年暮れから試行的にスタートしたものであるが、1995年春から毎週2回のペースでの定例訪問活動に乗りだし、一応現在まで継続している。メンバーは学生と一部社会人を含み、活動日には飛び入りの参加者も歓迎するといった、オープンな組織である。この組織に属する大学院生と上智大学社会科学の園部雅久助教授と私が中心になって調査を企画し、一斉調査はメンバーの全面的協力を得て1996年3月22日夜7-10時に行われ、インタビュー調査は1995年初夏ごろから96年9月にかけて、全体で100人を目標に、園部、岩田、山口、北川、古谷の大学院生と一部学生の協力によって行われた⁹⁾。

こうしたボランティア活動を基盤とする社会調査には、長所と短所がある¹⁰⁾。長所は、調査以外に2年以上の歳月をかけて、この地域を歩き、見つめ、断片的ではあるが彼らと話をしてきたことによって得られた情報と一種の「勘」があったため、調査地点や時刻の設計が容易でインタビューへの協力も得やすかったことがあげられる。また短所としては、ボランティア活動における一種の援助関係が調査関係に入り込んでくることによる相互の混乱がある。当初、人間関係をボランティアによって作ってからインタビューを行うことのメリットが考えられたが、流動の激しい新宿の路上では必ずしもそれが成功しないこと、またなまじ親しくなると、インタビューがしにくくなる、といったことが経験された。

(2) 一斉調査から得られた新宿の路上生活者の概観

まず96年3月22日夜の一斉調査による新宿の「路上生活者」の概要について報告しておきたい。調査地点は、新宿駅地下街を中心とする地域（駅西口地下広場交番まわり、その奥のスバルビル角の通称「目」の奥まった一画、丸の内地下鉄の東側通路、西側通路、京王線側の通称インフォメーションの前部と後部、

地上は西口スバルビル周辺)であり、これらを8区画に分け、それぞれ調査員を配置して夜7時から10時まで一斉に調査を行った。一斉調査の意味は重複をできるだけ避けたいということによる。これらの地域は調査時間帯に路上生活者が比較的集合することがあらかじめわかっている地点である。新宿の路上生活者は、4号街路撤去後はインフォメーション周辺を除いて常時そこに居ることのできる場所はなく、いくつかの場所を流動して一日を過ごしている。夜8時前後は、閉まったビルの入り口、夜間でも追い立てられない地下街の一画などに寝場所を確保することが多く、そのための集団化が見受けられる。そのまま寝てしまう人と、さらに夜中に食事探しなどで出ていく人がいるが、その両者とも比較的捉えられる時間帯である。

調査は簡単なアンケート用紙を作り、それに基づいて調査員の面接・記入によって行われた。短時間に上記7地点で一斉に調査を行うため、調査内容はできるだけ簡略化し、ボランティア活動への評価や要望の他、①性別・年齢 ②路上生活期間 ③これまでの主な仕事 ④その仕事の日雇いであったか否か、⑤その仕事をしていたときどこに住んでいたか、⑥冬期施設への入所の有無の6点に絞った。なお、寝ている人、酔っぱらって話ができない人、調査拒否等についても性別とその数はカウントすることにした。

(数と性別の分布)

調査結果によるこの地域の路上生活者数は359名、男性243名 女性16名であった。このうち調査拒否64名、その他調査不能者57名、調査対象者238名である。地点分布では、地上に57、地下インフォメーション前に48、インフォメーション後に45、交番周辺に39、スバルビル地下角通称「目」の奥まった一角に84、丸の内線通路東側37、西側49、合計359である。インフォメーションの前後は4号街路撤去後に形成された集中地点であるが、このほかいわゆる「目」の奥まった一画は、夜中寝に来る人で100人ぐらいになるという話は聞いていたが、実際まだ9時頃までで84名を数えて一つの集中点となっていることがよくわかる。なお、丸の内通路は、現在は規制がきびしくなりほとんどいない。またこの時点では都営地下鉄新線側の通路からも排除されていなくなっていた時期である。ただし地上にはもうすこし遠くにも存在していたはずである

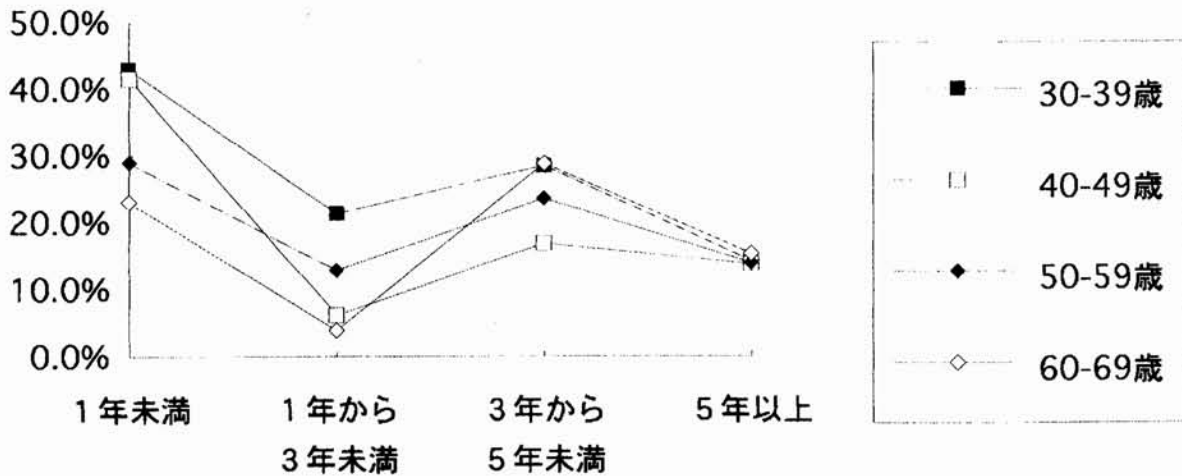
が、われわれの調査能力から、ごく一部に限られている。性別ではほとんどが男性であるが、女性も16名存在し、調査地点すべてに散在していた。

表1 路上生活者の年齢

	(%)						
	30歳未満	30-39歳	40-49歳	50-59歳	60-69歳	70歳以上	不明
3月一斉調査	1.7	5.9	27.3	39.1	21.9	3.4	0.8
臨時施設相談者	1.5	4.5	25	41.5	26.5	1.0	
新宿連絡会調査	1.9	6.6	23.6	39.2	24.5	1.9	1.9
臨時施設入所者	2.2	6.3	24.3	40.7	23.9	2.1	0.6

注) 臨時施設相談者は1996年1月新宿西口出張相談の200名
 新宿連絡会調査は1994年9月調査
 臨時施設入所者は1994-95年の冬期臨時施設入所者全体859名

図1 年齢別路上生活の期間

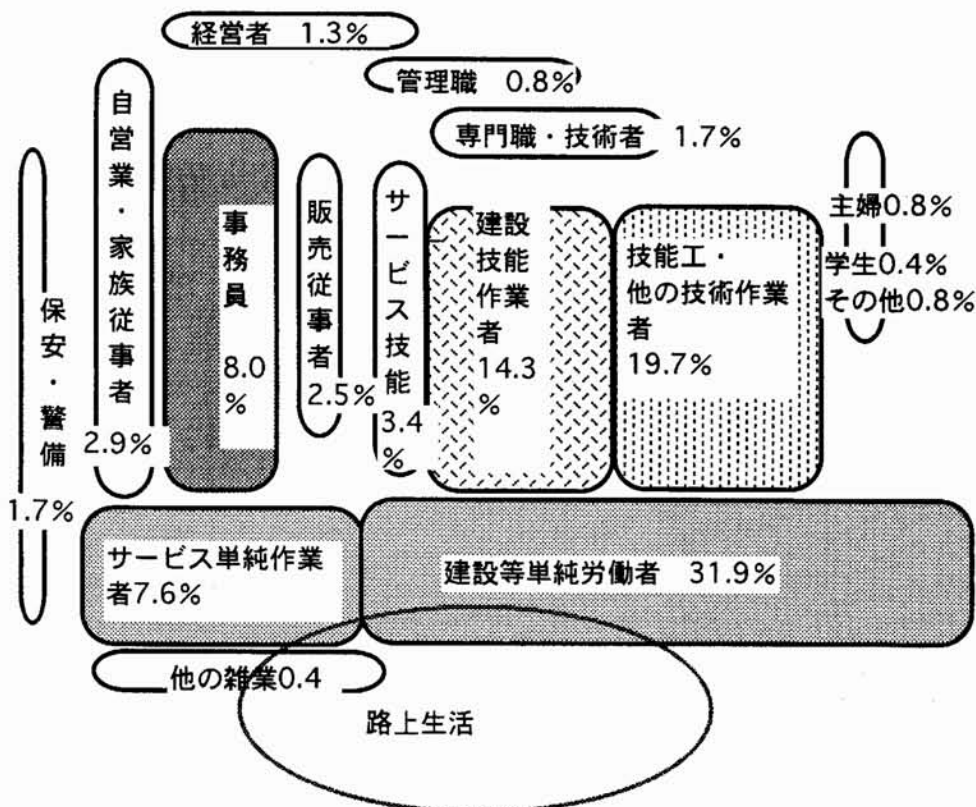


(年齢と路上生活の期間)

調査対象となった238名のうち年齢分布を見ると表1のようになる。50代が39・1%と最も多く、次いで40代27・3%、60代21・9%で、圧倒的に中高年齢層で占められている。この動向は、支援団体調査、臨時施設入所者調査、臨時施設相談者調査のいずれともほぼ同じであり、新宿の路上生活者が中高年齢男性に代表されることを示している。なお50代、60代を5歳刻みにしてみると、いずれも前半の50-54、60-64歳が多い。女性の場合は20代1名の他は40代2名、50代3名、60代3名、70代1名で、やはり50代中心である。

路上生活を始めてからの期間は、断続的な経験者もいるので正確な調査はアンケートでは難しいが、1年未満で31・5%、1－3年未満で22・3%、3－5年で14・3%、5年以上で28・6%である（不明3・3%）。93年あたりからの増加を考えると、この増加とからんで路上生活を始めるようになった人が半数以上、しかし5年以上の長い人々が3割近くいるということになる。なおこの路上生活期間を年齢別に観察すると、図1のように30代40代の多くは1年未満であり、50、60代では3年以上のところが多くなっていることが見てとれる。つまり相対的に若い層ほど路上期間は短く、50、60代以上では路上に滞在する時間が長くなっていることが推測される。

図2 主な職業の分布



(これまでの主な仕事)

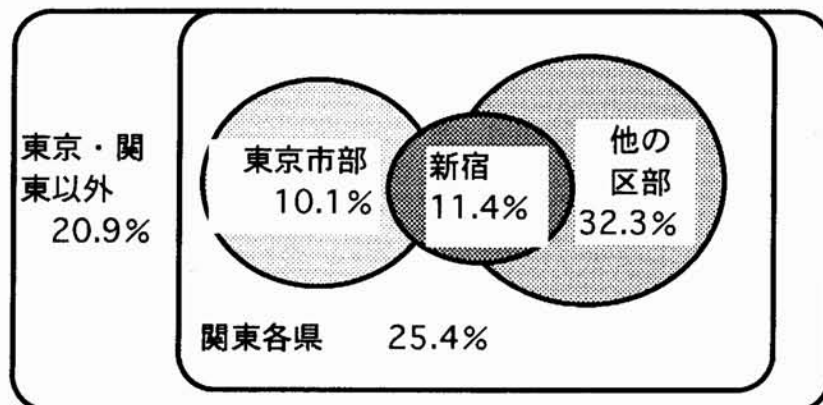
「路上生活をする前の主な仕事はなんですか」という問によって、どのような仕事が多かったかと本人が考えているかを聞いた。インタビュー調査のような職歴を細かく聞くことは不可能なので、このような手法をとったが、受け取り方は必ずしも意図したようにはいかなかったことも考えられる。ともあ

れ、結果からは図2のような職業階層分布を描くことができる。中心は、建設などの単純作業労働者31・9%であるが、路上生活＝「おちぶれた日雇労働者」という受け取り方とは異なって、工場労働者、運輸労働者などのいわゆる技能工、建設でも技能労働者層、事務員などの割合が思いのほか高く、また同じ単純労働でも、サービス業の単純労働者が一定存在している。なお、この主な仕事の日雇であったと応えたのは35・7%である。サービス技能職、主婦、学生などの存在 また経営者、管理職、専門職、自営業の存在も少数ではあるが見過ごせない。これを年齢別に見ると、60代で建設及び他の単純労働者であったという割合が相対的に高く(44.2%)、40代、50代では約3割とやや低い。30代、40代では、サービス単純作業がそれぞれ35.7%、12.3%と多く、40代ではサービス技能も4.6%とやや高い。50代では技能工など技術作業者22.6%、事務職8.6%などが相対的に高くなっている。

ここからはおそらく二つの点が推測されよう。一つはかつて貧困層プール論が示してきたように、貧困はその母体として単純日雇を典型とする不安定職層をもち、その不安定層はあらゆる一般階層に開かれ、そこから失業や倒産その他の失敗によって転落する人々を受けとめる役割を果たす。つまり貧困は一般階層からストレートに形成されず、その不安定層への転落、不安定層から明確な貧困層への転落という2重の過程があるというわけである。ここでも、あらゆる階層が示されていると同時に、建設とサービス業の二つの不安定職がそれらのプールとして機能していることが推測される。したがって路上生活者に「元日雇」が多いことと、それらの人々が以前には別の職種についていたこととは矛盾しない。第二にしかし、路上生活者の増大は、このあらゆる階層から何らかの理由ではじき出された人々をいったん受けとめるプールとしての不安定職自体が近年縮小していることと関連しており、したがって不安定職で長く留まれずに、早く路上にくることもありうるのではないかと推測される。60代では主な仕事为建设日雇と応えた人が多いのに、40代50代では少なく、事務職、技能工など技術作業者、サービス技能者などの割合が高いことは、このことを裏付けているといえないだろうか。「土方でもすればなんとか食える」という楽天的生活態度の浸透にも関わらず、土方や清掃などからさえ排除されて

路上に来る人々がある程度存在していることを予測させるものであろう。

図3 路上に来る前の居所



(以前の居住場所)

主な職業に就いていたときにどこに住んでいたか、という問は、路上生活者が、かなり遠隔地から「流れてくる」という固定観念の是非を問うために設定した。地域社会がホームレス問題の解決に乗り出すのを避けたがるのは、どこかの「流れ者」の世話をするのが不合理に思えるからであろう。この結果は、図3のように、東京都が最も多く53・8%、次いで関東25・4%、東京・関東以外は20・9%にすぎない。東京の中では、区部が43・7%と最も多く、新宿は1割強、新宿に隣接した、中野、杉並、渋谷、豊島、世田谷、文京、港を加えると東京区部の半数以上23・1%になる。新宿が、JR、私鉄、地下鉄の集中した日本有数の巨大駅であることを考慮すると、この各線の延長上から人々はやってきたのであり、もともと都内や新宿周辺で働き生活していた人々が少なくない。

3 インタビューを通して見た路上生活への〈距離〉と意味

(1) インタビュー調査とここでの分析の視点

以上の一斉調査では、主な職業や居住地の多様性は窺えたが、50代を中心とする中高年単身男性の圧倒的多さという事実は、むしろ路上生活者の「怠け者・アルコール依存症」「自由人」「失業日雇労働者」といったいずれかのステレオタイプなイメージを追認させるものかもしれない。しかし、たとえば福祉現場

関係者などの間には、路上生活者はひとつのタイプではなく、いくつかのタイプがあるという認識が早くからあった。たとえば、一時的に路上にいる失業者、老齢・障害者、長期「徘徊型」路上生活者のような区分、あるいは戦前のいわゆる「浮浪者」調査では、「一時的失業者のルンペン化」と「本質的浮浪者」というような分類もあった¹¹⁾。こうした分類では、一時的な現象＝失業者と、長期・本質的な「自由人」か「怠け者」か、いずれにせよ路上にいるのを好んでいる人々に大別されるといった解釈がなされている。私も路上生活者の外観にだけ触れた頃はそのような区分もあり得るかと思っていたが、インタビュー調査¹²⁾によって、なぜ路上生活をするに至ったのか、路上生活はどのようなものか、今後どうしたいと思っているのか、といったことを個別的に聞き始めていくと、上記のような分類とは異なった、別の多様性に気がつかざるを得なくなった。

それは次のようなことである。インタビューにおいて、聞き手である私は、一般社会にスタンスを置いて、そこからなぜ路上生活をしているのか？と問いかけるわけだが、話し手の個々の路上生活者がそれに応えようとする時、彼のスタンスは必ずしも路上で生活する者としてでなく、路上生活と一般社会の間を行ったり来たりすることがしばしばあった。たとえばすでに2年も路上生活をしているある男性(62歳)は「本当のホームレスになっちゃうのは、やっぱり嫌だね」という。「段ボールになんか寝ちゃおしまいよ。だから僕はこんな荷物(注:ポストンバック)もってね、いつでも働けるようにしているのよ」。この男性も、食べるために朝4時からボランティアのおにぎりに並ぶが「連中は2時起きで並ぶんだよ、たった1個のためにさ。ずらって並んでいる。あれまではなりたくないね」と「連中」と「僕」との微妙な差異化を試みせる。また別の男性(52歳)は5年になろうとする路上生活を「やりたくてやっているんじゃないよ、ぶらぶらしているのも結構つらいんだよ。なんとか脱出しようとおもうんだけど抜けきれない」と自分の生活を振り返った上で、「仕事の紹介してくれるっていう人もいるんだけど、同じホームレスだからね、こういう生活をしている人は正直言って信用できない」というのである。軍隊で鍛えられたという70を超えたある老人は「ここにいる人間を分解するとだね、40、50で仕事していない奴等、病人や老人、頭のいい若い奴等の三ついるね。一番悪いのは、40、50の奴

等で、飲んでぶらぶらしているだけ。働かなくちゃ。働くところはどこでもあるんだよ」と「一般人」顔負けの評論さえしてみせてくれた。

私という「一般人」の聞き手を前にして、路上生活者ではない自分が思わず引き出された、ということもあろう。しかし同時に、路上にいるおちぶれた「俺」であるが、別のホームレスを見るときは、一般社会にいたときの「俺」がしばしば出てくる。あるいは別の「俺が」路上での暮らし方に一定の規範を与える。路上で暮らしている人々自体が一方で確かに路上生活をしているのに、他方そこから〈距離〉をもった自分の目がある。この〈距離〉はさまざまであり、おそらくは路上生活をするに至った経路、それらの人々の一般社会での位置と密接に関連していよう。また、そのことが路上生活のそれぞれの人々にとっての意味や、そこからの「脱出」の意欲を相違させているように思われるのである。インタビュー調査そのものの全体的分析は今後の課題であり、また紙幅の制約もあるので、以下では試論的に私自身が直接インタビューした22ケースに、学生の行った5ケースのテープ記録を加えた27のうち、家出等を除く24ケース（男性23女性1、年齢は）を素材として、この〈距離〉という視点から路上生活に至った理由と彼らにとっての路上生活の意味をスケッチしてみたい。

なお、インタビュー調査そのものは、大まかに、新宿での路上生活について、路上生活に至った理由と生活歴、行政やボランティアへの意見と今後の展望、の3つの領域とそこで必ず聞く項目を設定しただけで、自由に語ってもらうという方法をとった。テープレコーダの利用を了解してもらい、2～3時間をかけて聞き取ることを目指した。対象者はボランティア活動時に適宜ピックアップして依頼するという形である。話すことを嫌がらないタイプと嫌がるタイプがあり、後者を落とさないような努力を極力行った。

(2) 路上生活者であること－経営者層とその失敗

路上生活者は皆「わけあり」だという。「好きでこんなことやってられるか」といわれれば、確かにそうである。ではどのような理由で路上に来たのか？また路上に来る前はどこでどのような生活をしていたのだろうか？

24ケースをまず彼らが「一般社会」にいた時の社会階層上の位置（主な職業、

学歴)と、婚姻関係の有無によって区分してみると次の4つに大まかに分けることができる。①小経営者もしくは専門的・管理的職業、結婚しており、学歴は高卒以上である。②自営業、技能職もしくは事務系サラリーマンであって、1名を除き結婚経験あり、学歴は高卒以上。③建設、もしくはサービス業の単純労働者を長く経験しているが、結婚経験あり、学歴は小学校もしくは中学校卒。④技能工、建設単純労働者などを長く経験しており、未婚、学歴は1名高卒を除いて小・中学校卒。①が5名で40代2名、50、60、70代それぞれ1名②が8名で40代2名、50代4名、60代2名、③が女性1名を含んで6名で、50代3名、60代2名、70代1名、④が5名で、50代3名、60代2名である。既婚者19名、未婚者5名となる。路上生活への〈距離〉は客観的にみれば「一般社会」で安定した上位の社会階層に位置していた人ほど遠く、また結婚して自分の家庭を持っていた人ほど遠い。彼らが路上へ来ることはまさに「落ちてくる」ことになる。他方、たとえば④のように、結婚もせず長く不安定な職業にあった場合、路上は客観的距離としては近いということがまず推測される。

①のような上位の階層から路上までの「下降」過程にはなんらかの大きな「失敗」が介在している。またこの「失敗」の結果一気に路上にくるのではなく、建設日雇かサービス単純労働へまず流入し、飯場やドヤ、アパートなどにとりあえず落ちつくことになる。路上へは、この飯場仕事などが得られなくなってから現れる。したがってこの場合、これらの人々にとって最も「問題」なのは上位の階層を失った「失敗」であって、路上へ来たことではない。「失敗」は倒産4名、歯科技工士の資格で歯科診療所を経営して逮捕された1名、であり、経済環境が悪いというよりは経営者としての自分の失敗と受けとめている人が多い。未婚者1名を除いて全員この失敗を期に離婚している。元ニセ歯医者65歳の男性は「まあ、妻子もだまされたってことになっちゃったからね。しょうがないよ離婚は。刑務所出た後もねカッコ悪くって連絡なんかできゃしないやね。技工士の資格も10年停止だから復活できたんだけど、もう手が衰えちゃっているからダメだと思ってね」という。失敗の後、倉庫係、建設日雇を転々としていたが、この最後の頼みの仕事なくなり、友人の家に転がり込んだが大家さんに見とがめられて、駅に来たのだという。かなり大きな工務店を経営していた

40代の男性、不動産業を営んでいた70代男性のいずれも離婚→建設日雇の途を歩んでいる。倒産はおそらく借金の問題を伴っており、そこから身を隠すということもあろうが、離婚をも含んで生活の大変動が生じている。路上はその変動の最終的な結果でしかない。5人の話の大半は、失敗前の「良き時代」のことであった。「小説になるような大波乱だよ」と言った人もいるし、5名のうち2名はこの「失敗」にかかわる経過を「手記」に書いてくれた。1人はそれを図書館で書いたという。「久しぶりに字を書いたけど、忘れちゃったよ」。なお、字を書く、図書館へいくというのは、路上では「尊敬される」ことである。

しかし、もちろん路上生活は厳しい。かつての生活が華やかだただけにその落差は大きい。風俗店を経営していた55歳の男性は失敗の後も体力的に無理だから建設の仕事には就かなかったが、清掃などサービス業の単純労働をいくつか経過したあと仕方なく路上へ来た。「最初来たときはおどろいたね。こんなところで寝られるかなって。当初は足が痛くて歩けなくなった。つい最近まで毛布2枚敷いていたのよ。新聞紙だけになったのは最近。新聞紙には意味があって虫よけなんだって。ここに来た当初は、明日どうやって食べていこうかって、そればかり考えた。でもなんていうか人間てしぶといね。なんとしても食わなくちゃって思うとなんでもする。なんとしても生きていこうとするね」と夜中阿佐ヶ谷のコンビニまで弁当をさがしにいく自らの変貌に驚き、でも路上生活にはやっぱり慣れていないという。この人の場合は、適当に他のホームレスともつきあっており「お金など持ってきてくれる人もあって、そういうのをついてあてにする自分が嫌になるときもある」といっている。あまり他の人とつきあわないという人もいる。「あいつらはホームレスが当たり前と思っているからダメなんだ。自分が悪いということを忘れてる。ああいう仲間に入って巣くっているのも嫌だ」から地下にはいかないと、元工務店経営者はいう。彼は現場で屋根から落ちて腰を打って働けなくなったが、まだ若いので働きたい「いつでも働けるように走って身体を鍛えている」といっている。なお、将来については未婚で各種学校を営んでいた40代男性、風俗店経営者は「もう一回チャンスが欲しい」と経営の夢を捨てきれない。「風俗なんていい加減な仕事で、バブルの頃だからやれたのかもしれないけど、何かね、もう一回チャンスがある

ような気がする」という。しかし60代と70代の2人は年齢もあろうが「もうやりたいことはやっちゃったから」と消極的である。70代の元不動産業経営者は「死にたいけど死ねないから、身内にでも頼ろうかな」といい元ニセ歯科医は「施設も考えるんだけど、ちょっとまだ思い切れない」と述べている。

(3) 路上生活者であること—技能職：勤勉さと“ふてくされ”

②の場合も①と類似しているが、倒産→離婚→飯場というようなドラステイックな過程は必ずしも通らず、同じ技能職を転々としているうちにだんだん不安定なそれへと落ちていく、または自営業者が病気や不景気などでだんだん仕事がなくなるというような経過をたどるケースと、また失業、家庭内不和、サラ金といったきっかけとなった「事件」がある場合がある。いずれも離婚がその前後に絡んでいるのは①と同様であるが、離婚が下降移動する積極的な引き金になっていることが少なくない。またサラリーマン、技能工などでは年金受給資格をもっている人が一部含まれているなど、その安定したかつての生活が窺える。たとえば、配管工であった男性は、10年ほど前から糖尿病で目が悪くなり、仕事がなくなってアパート代が払えず、夜逃げして路上へ来ている。彼はもう長いこと新宿区内に住んでいたので「段ボールハウスは前から見ていたが、まさか自分がそこに住むとは思っても見なかった」という。調理師であった男性は、離婚をきっかけに上京し、新聞の求人欄を頼りにあちこちの店を転々とした。たいていは寮とかマンションの部屋つきで、緊急連絡先だけ書けば雇ってくれたが「一つ辞めると、それよりいいところというのはなかった。“落ちる”という言葉があるけれど、本当です。自分なんか独り身だから、なあに一人だから何とでもなるって思ってきたのがいけなかったのかな。この年になると、これまでの自分の人生を思うと、葛藤があります」。そのうち調理の仕事がなくなって土方、飯場の賄い、サウナの従業員などもやったという。「最近は何新聞見ても電話しても、年いくつ?と聞かれて、車の免許は?など要求が多くなってね」結局、「貯金も使い果たして、カプセルホテルなどにも泊まれなくなって、路上へ来た」という。

測量技師、旋盤工、自動車工、鉄工所など技能工として働きながら、失業や

サラ金、離婚や一緒に仕事をしていた兄弟や親戚との不和から、家を飛び出していくつかの職を経たのち、結局建設日雇となった人たちもいる。またやくざの喧嘩に巻き込まれて懲戒免職となった人もいる。建設日雇はここでも最終的な受け皿の役割を果たしているが、そこまでの過程で臨時や期間工など不安定な職ではあるが、その技能を生かした職を転々としようとしている。安易な転職、気の短さを反省する声も強いが、同時に一生懸命職を探しているのに、建設日雇やガードマンなどさえ得難くなった状況を訴える姿勢も①よりは大きい。いずれも離婚経験者であるがそのことには触れたがらない。結婚はと水を向けると「えーそんなことまで聞くの？あるよ。離婚したけどね。子どもはない。子どもがあればこんなことにはならなかったかもしれない。考えてみれば、一緒に仕事をしていた兄貴の家族とのごたごたや、離婚とか、いろいろつらいことがあってね。それでふてくされてこんなことになっちゃったのかもしれない。こういう話すると思出しちゃうから嫌なんだよ。姉さん（私のこと）が初めてだよこんな話するの」。東北出身のこの人は、離婚、長兄との不和が引き金となって、家業の鉄工所を飛び出て、工場をいくつか回った後建設日雇となった。“ふてくされる”というのはぴったりの表現のように思える。「あんたなんか好きでない」と妻に言われたという人もいた。「青春を取り戻したいっていいやがって、出て言っちゃったよ」といった人もいる。夫の側の暴力などについては誰も触れないからわからないが（酒は好きだがギャンブルはやらないという答えが多かったが）、離婚が一つの契機であることは疑いもない。また離婚以外では、妾の子だったなど家庭内での立場の不利を語る人もいた。

ともあれ、この②の人々はおしなべて勤勉な路上生活を送っているという共通点がある。勤勉という意味は、求職活動、路上での雑業への従事度がおそらく最も高いからである。それはまた、未だに彼らのアイデンティティが技能職としての労働にあることを物語るものでもあろうし、その時の勤勉な気風が規範となって路上生活を支えているともいえよう。たとえば、先の配管工は糖尿病で足がしびれているが、時々看板持ちをやって1週間1回6時間5400円ほどの仕事をする。もちろん本当は配管工の仕事がしたい。「土方とは筋肉の使い方が違うんだね。それに全部段取りして現場まかされてたからね、以前は」。また事

務系のサラリーマンであった52歳の男性は新宿の路上での雑誌集めの古手である。「最初は3つぐらいしか(雑誌集めのグループは)なかった。今は15ぐらいあるかな。6人ぐらい仲間がいる。朝6時半頃一カ所に集まって、10時半ぐらいまで、中央線の八王子から高尾の方まで3回ぐらい回るかな。1冊40円くらいだけど、売れ筋っていうのがあるから、店番する人がそういう情報を夕方書いて店においとくのを見ておかないとダメだね。やっぱり仕事するからにはちゃんと情報集めてやないと拾ってきても返されちゃう。そういう人は抜けて行くね。多いときで5000円ぐらいになることもある。仕事があることはいい。毎日ぶらぶらしているのはつらいからね」。彼はこのほか野球場の前売り券に並ぶ仕事にも行くという。建設日雇を今もやっている62歳の男性は、胃穿孔で入院手術したが、退院後たった1ヶ月しか宿泊所にいられなかったのも、また路上から高田馬場で建設の仕事を探し、仕事があれば働く。「先週も働けて、6万ほど稼げた。稼いでくると弁当やたばこなど買ってきてこの辺の連中に配っちゃうんだけどね。だってカプセルは1日4100円もするから、少々お金あったって泊まりきれないからね」。元調理師も新聞広告で求職活動をつづけ「なるべく住み込みのところ」を探している。もっとも先の”ふてくされ”の人のように、「仕事はさがしているけど、なにしろ現金が1銭もないんだから新聞の広告なんかで仕事探したって、行く交通費もないんだから、どうにもこうにもここ動けない。駅手配はひどいのが多いからね」と八方ふさがり状況をこぼす人もいる。しかし、家族とも離れ一人になった今、腕に自信のある人ほど、労働への復帰を願う気持ちが強い。元の仕事に就ければいいけれど、「植木とか営繕なんかでもいいんだよね。まだいろいろなことが出来ると思うんだけど」と62歳の元旋盤工は熱心にいうのである。

(4) 路上生活者になること—下積みの人々：ひとりぼっち

路上生活が「とことん落ちる」ということであるのは、皆変わらないが、その〈距離〉の近い人々は、あまり落ちたことを気にしないようにみえる。③④に区分した人々は、学校もそこそこに、早くから厳しい人生を送ってきた人々であり、路上生活もその厳しい人生の延長線上、あるいは生きていく方便とし

である。ただし③④の差は結婚の有無であり、④は「てめえ1人生きていくことに精いっぱい、結婚なんて考えもしなかったし、そんな余裕もなかった」(60歳男性) という意味でより厳しい環境にあったといえるかもしれない。この④にあたる人を5人しかインタビューできなかつたことは、彼らと私との人生の〈距離〉を示すものであろう。

③④に区分された人々の多くは、学歴こそ中卒(旧小卒)となっているが、学校にいるときから働かなければならなかつた人が少なくなく、したがってはじめから不安定な単純労働に従事している。④では、唯一大工をしていた人のみ技能職であるが、あとの4人は行商→新聞拡張員、日雇、ラーメン屋、パチンコ店住み込み→ガードマンなど転々、旅館下働き→清掃などである。元大工(55歳)は、目が悪くなって大工がつとまらなくなり、工務店を辞めて「土方になった」という。大工の仕事は木工工事が少なくなって辞める人が多かつたそうだ。辞めてぶらぶらしていたら離婚になったという。④の場合も、鳶職1名の他、3人は建設日雇を長く転々とし、1人は飯場仕事を長くやった後、高齢になって手配師から「新宿は老人ホームと変わらない」といわれて屋台の餅屋に転じた。①②の人々にとって建設やサービス業の不安定職はその「失敗」や事件の後の受け皿であったが、ここではそれらが最長職であり、生きる頼みの綱であった。したがってその職場の喪失に対抗して「生きていく」手だてとして路上生活しかありやうがないのである。なおこの③④の中に自衛隊に一時いたという人が3人、警察学校に1人いる。自衛隊は、この人々の職歴の中では燦然と輝くものとして語られている。

③の中で女性(57歳)は中学卒業であるが自分では「小学校もろくろくいていなくて、字が書けない」という。「字が書けないのは、首を4回も切って死に損なつたからで、物覚えがわるくなつた。それで漫画の本からひらがなを覚えたの」。彼女は在学中から旅館の下働きや子守をしてきた。親は漁師だったが子沢山で生活は苦しかつたそうだ。結婚して夫に履歴書を書いてもらつて清掃の仕事などをしてきたが、夫が酒好きで蒸発してから、姉の元に身を寄せたが、「意地悪されて居心地が悪く、働けと言われて紹介してくれた会社を探しに新宿まで来たんだけど、どこだかわからなくなつて」公園で寝泊まりするようにな

ったのだという。また最も高齢の76歳の男性は、ばくち好きで傷害事件をおこしたのを理由に、婿養子に行った先を追い出されてから、新聞拡張員をやって暮らしてきた。この人も字が書けなかったという。「字と算術は軍隊で覚えた。学校出てないから研究したんだよ。自分を守るために。…だからよ、新聞拡張員で都内あっちこっちを渡り歩いたときも、履歴書ちゃんとに書けるからね、頭いいって思われて使ってくれるの。履歴書書くのと口先は自信あんだ俺。拡張の仕事は1本とると7000円だからね、奥さん、旦那に刺身でもつけてやってよこの2000円で、って渡しちゃうのよ。それでも5000円だろ。1回とってくれた客大切に6ヶ月6ヶ月で回していけばうまいこといくわけよ。」

④では炭坑出身の男性(52歳)は中学の時から炭坑で働いていたが、閉山と重なり、集団就職でクリーニング店に就職した後、オリンピック景気にわく東京で建設日雇を長くやってきた。また鳶職であった男性は、小さい頃養子にいった先の親に中学2年で死なれて天涯孤独となり、友達の家を納屋に寝泊まりし、牛乳配達や新聞配達をして自活し、それから自衛隊にいて、鳶の親方に弟子入りした。路上に来たのは「足場から落ちて腰が折れたから。労災保険はおりたけど、退院した後は首になって誰も使っちゃくれない。友達の仕事2-3ヶ月手伝った後は仕事が切れた。それで新宿で暮らすようになって4年になる。景気がよくなんないところまで(仕事が)回ってこないよ。年金なんか入ってなかった。今は土建組合なんてあるけど、われわれの時はおやっさんが入れてくれなかったし。今更保証人になってくれる人もいないしね。そのうち土方の仕事まで保証人・住民票がないとダメな時代がくるんじゃないの?」。この鳶の場合は労災事故が直接の原因、先の大工も目が悪くなる病気が契機となっているが、不安定な職業の場合、失業は明確な形で現れない。仕事のない日が失業であり、ある日は就業者である。したがって、いつのまにか仕事が切れてきて路上で暮らす日が多くなったという展開をとることが多い。路上に中高年が多いのは、不安定な仕事でも若い労働力しか採らなくなったからである。60歳になったらダメとか50でもダメだといわれたなどよく聞くが、いったん現場に行ったが「血圧を測って帰されたこともある」(元大工)。住居も飯場やドヤ、カプセルホテルなど、それ自体広義のホームレスであったわけだから、路上との

〈距離〉は近い。ラーメン屋やパチンコ店、清掃、ガードマンなどを転々としてきた男性（60歳）は、仕事があるときは住み込み先、無いときは新宿だけでなく、別のあちこちで「アオカンをしてきた」。66歳の男性は飯場、カプセル、屋台の寮をあちこちまわっている。路上とカプセル等の違いは、料金である。安価なドヤやアパートが少なくなった新宿周辺では、目に見えるホームレスになるしかない。また先の66歳の男性のように屋台のオーナーの寮に2年ほど入ったが「オンぼろでね、陽は射さない、壁は自然に崩れてくるって状態で。これじゃあってんで、駅にきたのよ」。

③で結婚した経験のある人々の離婚の原因は、先の大工の失業の他、競馬などギャンブル、恐喝など犯罪による服役などが契機となっている。ただし②の場合とは異なって、離婚が路上生活の大きな原因とはなっていない。もともと貧しく、安定した生活が営める状況にはなかったからである。1人精神病院へ4回入院歴があるという人は、妻も同じ病気で入退院を繰り返し、「くっついたり、離れたりにしている」そうである。この人は自分が何年路上にいるかもわからなくなり「福祉の人に教えてもらった」といっている。

なお、犯罪やギャンブル、酒は④を含めて陰に陽にこれらの人々の生活に影響を落としている。「飯場でこれっきゃやることはなかった」とか「だって親がテラ元だったんだから」とあっけらかんという場合もあり、また継母への反抗心で非行を繰り返し少年院に入っていた人、犯罪と認識しないまま手先になった人などもいる。酒では、自助グループAAのメンバーの草分けのような人がいたが、「俺だって赤ん坊の時からアル中になろうとおもったわけじゃない。早くから親に見捨てられ、耳が悪くなって馬鹿にされ（身障6級）13歳の時から焼酎飲んでたから。AAで何とか立ち直ろうと思ったけど、スリップしちゃったよ。だって酒飲んで真っ黒けになっても泣く人はいないんだよ。えー、治っても喜んでくれる人もないんじゃない、何のためにやってるのかわからないじゃない」。ひとりぼっちの寂しさ、飯場などの職場環境、「相談する人もないからついやくざなんかに頼っちゃう」、虚勢を張らないと生きていけなかった人生などがこれらに投影されている。

③④に区分される人々の路上生活の在り方には二つのタイプがあるように見

える。ひとつは「人からもの貰うのは嫌だ」から区役所のラーメンやボランティアのおにぎりなどは並ばないという。「貰うくらいなら、ごみ漁ったってそのほうがいい」という人もいた。②の区分の人たちで「ごみまで漁りたくない」といっていた人が何人かいたが、それより「貰う」方がよくない、というのである。特に幼い頃から一人でやってきた人に「人に頼らない」という一種の自尊心が強いように見える。「怠け者っていうけどさ、一回ここにいるみんなに仕事あてがって、そいで怠け者かどうか篩にかけて貰いたいもんだよね」という元鳶の人は腰を痛めた後も毎日高田馬場に顔を出すという。「夜中に三鷹まで歩いて弁当取りに言って、その後馬場へ行く。往復6時間かな。腰を悪くしちゃ使ってくれる親方もいないけどね、それでもつきあいはしてくれる。片づけなんかあるかもしれないから、ともかく毎日行く。そうすれば路上生活から足洗えるような気もするんだね。野球場で並ぶ仕事に行くこともある。福祉には喘息発作のとき1回だけ世話になったけど。夜寒いから夜中歩くってこともある。」元大工も毎日馬場へ歩いていく。炭坑出身の日雇をしていた人はほとんどの生活必需品をごみ箱から調達できるという。いいこととも思わないが「頭より手が先に出る。猫と同じだね。夕方から夜中まで探して歩き回る」そうである。怠け者どころか、勤勉と表現するしかないであろう。仲間には頼らず（ビルの影などに）なるべく一人でいる、一人でいられるから新宿はいいという声も聞かれた。“強いひとりぼっち”というべきか。

これに対して残飯も食べるし、貰いもする、という方がもちろん数としては多い。振舞酒に飛びつくこともある。通行人にお金をもらうこともある。拾った宝くじが千円になることもある。支援団体とも適当につきあい、福祉行動で区役所にも行く。いずれも「本当に相談する人もいないし、天涯孤独の自分が一日生きて行くだけ。どうやって食ってどうやって寝るかで精一杯」な人々の日常である。こういった日常は、ますますこれらの人々と「普通の生活」との〈距離〉を広げていく。「芝浦（臨時施設）に入った後、自分で仕事探したらアパート斡旋してくれたんだけどさ、お祝いに飲んでパーにしちゃった」（60歳元ラーメン屋）とか「生活保護受けたけどそのお金みんな飲み屋のねーちゃんたちのところにいって、失敗した」（66歳元屋台）という“弱いひとりぼっち達”

の経験は、福祉関係者の怒り、彼らの自信喪失を深めつつ、彼らと一般社会との〈距離〉を拡大していく。制度に乗らない人々というレッテルが貼られるのはこれらの溝に由来する。

「寝ててどうなるのかなあと思うことがある。このまま死んじゃうのかなと思うこともある」③④に区分される人たちが共通しているのは、「死ぬほうがまし」という言葉である。「これ以上落ちることはないって思うしかないけど、時々死にたくなる」ものの「首吊る勇氣もない」。路上は生きていく場所であると同時に死に場所なのかもしれない。「どうにかしようなんて思わない。どうにもなりゃせんで」（76歳・元新聞拡張員）。

社会階層上の位置などの客観的指標と路上にいる人々の主観的な路上への〈距離〉の取り方を結びつけた上記のような分類はあくまで試論的なものであり、〈距離〉は路上にいる期間の長さなどによっても変化していく可能性がある。また〈距離〉という視点の他、たとえば彼らの生きていく〈時間〉の意味の違いにも着目する必要があるかもしれない。路上生活が「その日その日を生きていく」という意味で1日単位の厳しい生活であるとすれば、彼らに長期の見通しを求めること自体無意味であろう。またここでの4分類のなかでもおそらくその固有の〈時間〉の相違があり、それは路上生活の意味やその脱出への意欲と関わってくることになるだろう。これらを含めた分析は今後の課題に残されている。

注

- 1) 大阪西成地区については早くから野宿者調査があり、また1996年秋にも実施されているという。横浜寿、大田区などでは福祉関係者や区職労の報告があり、また川崎では支援団体の活動報告書などからうかがうこともできる。
- 2) 近年の議論は、たとえばクリストファー・ジェンクス「ホームレス」（大和田弘毅訳、岩田正美監訳） 図書出版社 1995年などを参照
- 3) 朝日新聞1996年12月28日 朝刊。なお、類似の捉え方は、マスコミや行政にも根強く、またある研究者は、私がホームレスを極貧として捉えると発言したのに対して、自分を糖尿病だといっていた路上生活者に出会った体験を引いて、糖尿病のホームレスは極貧とはいえないと主張した。

- 4) キッセらはそれを社会問題の自然史と呼んだ。(J. Iキッセ・M. Bスペクター「社会問題の構築学」(村上直之他訳) マルジェ社 1992年)
- 5) たとえばブースは、社会主義運動の宣伝ビラにあった貧困な市民の数量への疑問から、社会調査による貧困の量を分布の正確な把握を志し、しかし宣伝ビラにあったより高い数字を算出した。
- 6) 園部雅久「ホームレス調査をめぐる方法とデータ」日本都市社会学会年報14号 1996年6月
- 7) もちろん、わが国でも、支援団体やボランティアの行ったアンケート調査、あるいは行政の行った臨時施設入所者調査などがようやく実施されはじめている。ただしその多くは、内部的に行われたものが多く、研究者を巻き込んで、すなわち本格的なホームレス調査としてなされたものはほとんどないといってよい。したがって、そのひとつ一つは貴重なものでありながら、調査方法や調査票についての記述がないとか、単純集計結果しかだしていない、あるいは調査項目が構造化されておらず、失業や住居の喪失、病気などの要因が並列的に選択肢のなかに存在しているなどの点で、そこから今日の路上生活者問題を解決しようとする方向を示すことは難しい。
- 8) この会は「スープの会」という名称である
- 9) インタビューは上智大学グループ50、都立大学グループ50という目標値を建て、実施された。都立大学グループでは、私その他、都立大学大学院社会科学研究科の院生 山口恵子、北川由起彦 日本女子大学人間社会学研究科の院生 古谷直子が参加し、また学生では東京都立大学 後藤浩二、日本女子大学 本間純子 上田美穂が参加した。
- 10) この点については、前掲 園部論文を参照。
- 11) 詳しくは拙書「戦後社会福祉の展開と大都市最底辺」ミネルヴァ書房1995年参照
- 12) インタビュー調査は一定の客観的事実をデータとして提供するだけでなく、回答者の主観的側面を浮び上がらせることができる。いいかえれば、客観的事実は回答者の主観を通して「語られる」。この両者を区別すると同時に関連づけて把握することがこうした調査手法の有効性を示すものとなろう。また社会福祉のような問題解決と積極的に関わる領域での社会問題の扱いにおいては、事実そのものだけでなく、当事者がこれをどう捉えているか、という側面はきわめて重要なもの

となる。

文献

岩田正美 (1995) 『戦後社会福祉の展開と大都市最底辺』 ミネルヴァ書房

ジェンクス、クリストファー (1955) 『ホームレス』 図書出版社

園部雅久 (1996) 「ホームレス調査をめぐる方法とデータ」日本都市社会学会年報14号

Rossi, P (1989) Down and Out in America, University of Chicago Press